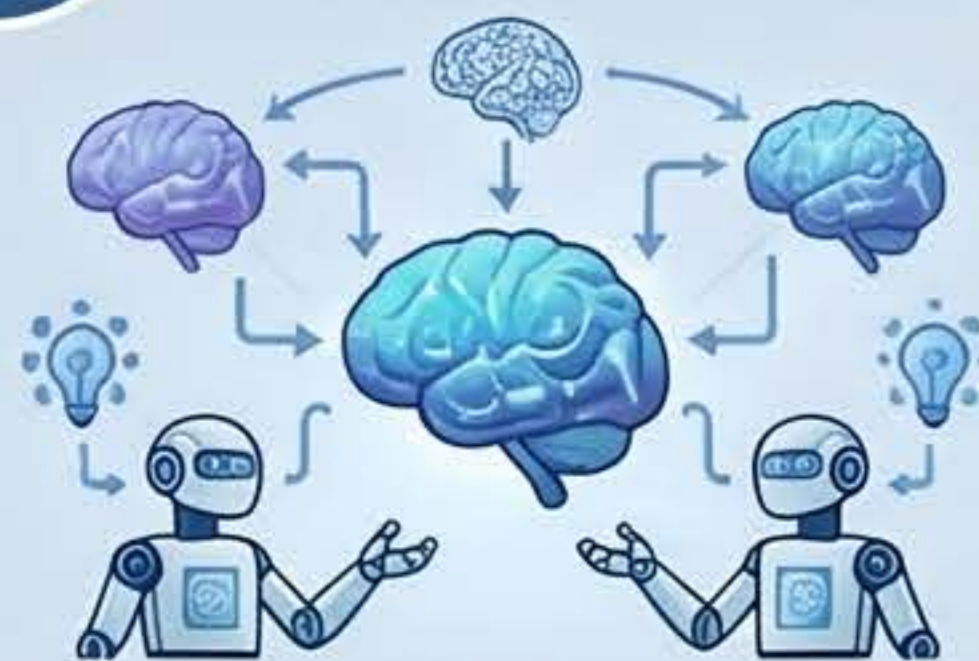


特許生成AIの技術変革：エージェント型 vs 従来型アーキテクチャ比較

エージェント型：「思考パートナー」【目標駆動型】



ゴールから手順を自律的に編成。計画時と最終チェックが主な介入点。

介入：低頻度・粗粒度

従来型：「補助ツール」【指示駆動型】



ユーザーの指示（例：要約せよ）に従い単発処理。タスクごとに入出力の確認が必要。

介入：高頻度・細粒度

エージェント型ツールの主要プレイヤー



PatSnap Eureka

独自の「PatsnapGPT」とRAT技術で最も成熟
多段推論手法RATを採用し、ハルシネーションを抑制しながら多機能エージェントを駆動。



Tokyo.Ai

日本初の「ディープエージェント方式」実装
複数のAIが役割分担し、検索式や思考プロセスを可視化することで、調査からドラフト作成までを1チャットで進行。

主要ワークフロー：調査・FTO・ドラフト / 整理・調査・提案書
(マルチエージェント：あり)

従来型（指示駆動・HITL）ツールの主要プレイヤー



Genzo AI

ベテランの「暗黙知」をプロンプト化するHITL設計
人間がAIの提案を確認・修正することを前提とし、年間8,000万円の外部コスト削減などの実績。



Summaria
AI Samurai
Patentfield

特定タスクの精度と制御に特化した専門ツール
講解支援、特許性評価とクレームチャート生成、大規模査読など、目的に応じて使い分けられます。

主要ワークフロー：届出・中間処理・明細書 / 調査・評価・文書作成
(マルチエージェント：なし)

実務への導入ガイド（導入の3ステップ）



従来型での効率化から始める
①従来型でAIの癖を把握。



限定ワークフローでのPoC。

③精度・説明可能性が
閾値を満たせば一気に通貫へ。



人間による統制（Human-in-the-Loop）

選定の閾値（しきいち）：設計上の最重要課題

「説明可能性」と「ハルシネーション率」が許容内か
エージェント型には「説明可能性」と「検証可能性」が不可欠

根拠となる引用ソースの提示が不十分な場合は、
従来型+人手レビューに留めるのが実務上の費明な判断です。